(1) 屋久杉による収納家具のデザイン研究

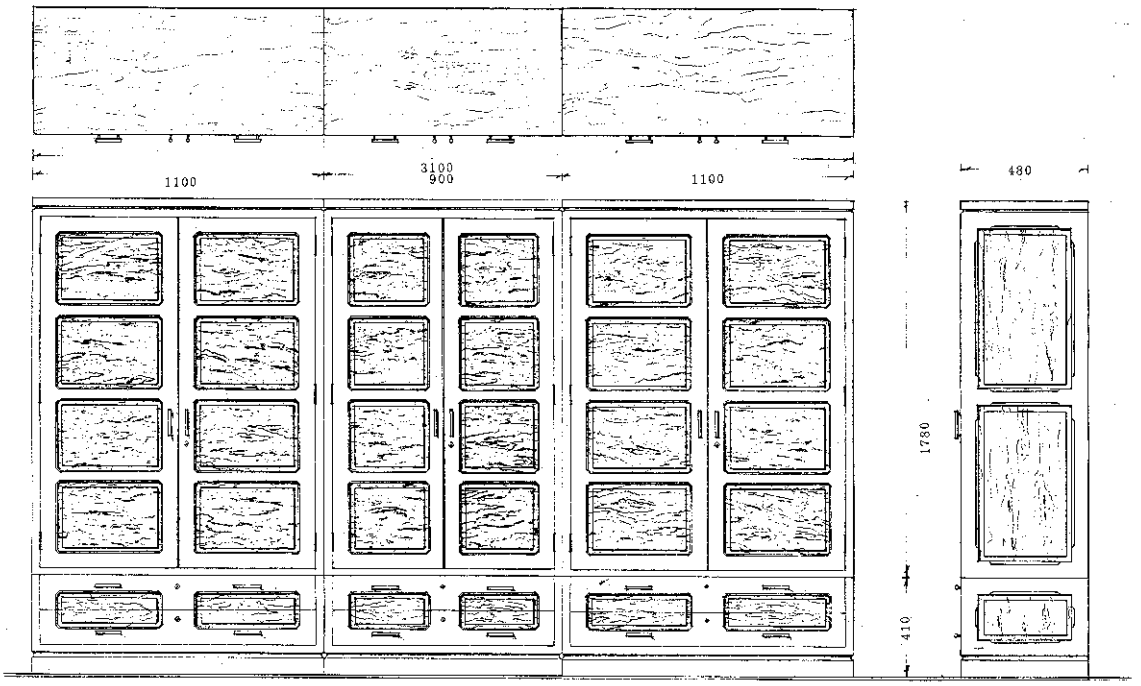
鮫　島　正登美

目　的

屋久杉による家具のデザインについては，従来は問屋の意向が強く本県企業のオリジナル製品は極めて少ない。従って最近目立った傾向として問屋サイドの製品だけでなく，自社オリジナル製品の開発に本腰を入れる企業が多くなっている。消費者ニーズ・業界の実態等を考慮に入れ，屋久杉を生かした高度なオリジナル家具の意匠改善が主な目的である。

概　要

デザインの対象としては屋久杉による収納家具を取りあげたが，この種のセットの場合セット物として一か所に並べるには，かなりの壁面を必要とする。従って別図のとおり単品でも販売できる家具のデザインを行った。



1. 収納3点セット（図）

3点とも二段重ねとし，下段は抽斗・上段は大開き戸とした。ソリッド材を多く取り入れ，軽量とするため，抽斗以外は框組作り，框材は柾板，はめ板は屋久杉特有の虫食材（長尺物はランマ材として使用）の端材を，ランマ製法を取り入れ使用する。端材として，利用の少なかった材料の高度利用によるオリジナル化をねらった。3点とも大開戸を主体としたもので，服吊タンスの奥行寸法を重ねタンス同様とし，内部は，リードハンガー前引2本付き・重・整理タンスは，抽斗・盆・小抽斗・小引戸を内造する。

2. 収納ユニット低家具

虫食端材利用の点では，前記同様（図，略）で，これは壁面利用の低家具として設計。主体は厚い天板と開戸で，前記同様框組とし，内部に棚だけの物，盆と棚，抽斗と棚，の三通りと

し，上に重ねると3本で，2,295・2,385・2475㎜の高さとなる。

成　果

企業内において，虫食屋久杉端材の利用方法を自社企業に合うようアレンジし「虫食シリーズ」として関西および北海道方面に出荷している。

(2) 木製家具の研究と試作

菊池　元

目　的

本県に比較的多く産出されるタブ材を主体とした，付加価値の高い，木製家具の研究と試作を行ったものである。

概　要

本県の場合屋久杉利用による家具は，その殆んどが県外に出荷される程その生産は多いが，同じ県産材とも云うべきタブ材利用による家具は極めて少ないのが現状である。

従ってタブ材利用研究の一環としてカップボードの試作を行い，展示会などへの出品を通じて発表を行った。

成　果

タブ材は材質的に問題が多く，中でも反狂等については特に充分な乾燥を施す必要があり，塗装仕上げについても含有樹脂（主として蝋分）などに対する適切な処置が必要である。試作品については練芯材は，奄美産材のフカノキ（抽斗，抽斗側板）を主体とし，天板，中棚の前面，側面には，ルーター加工による面取りを施し，前面左右の柱は旋盤加工し，装飾効果を求める様考慮したしかしタブ材にマッチした仕上げおよび取付け金具等の取扱いについては今後，充分調査研究する必要があると，認められた。展示会等への出品に対しても，業界一般の意見等を集約すると，比較的良い評価を得たものと思われる。

今回の試作を通して得られたものは，タブ材などの利用については他の材料，即ち屋久杉材などとの組合せによる装飾効果を求めた品質の高い家具の生産が必要ということであったと思われる。

(3) オリジナル家具の開発と県産材の活用研究

田原健次

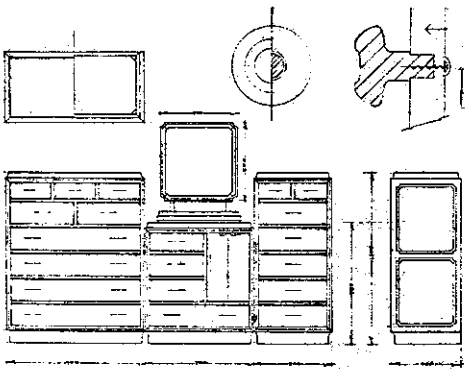
目　的

昭和50年を一つの分岐点とする需要形態の変化に対応し，本格指向の家具生産業界の振興を目指す，多品種少量生産品の有用性を試作を通して，実証しょうとするものである。

概　要

経済企画庁が発表した「52年度国民生活白書」でも裏付けられているように消費傾向の二極化が進み，耐久消費財には，より強く「個性化」が求められているが，これらの傾向は明確に家具製造業界にも大きな変化を，もたらしている。

そのため，目標として5カ年計画で上記目的の具体化に取り組んでいるものである。

本県の製造業界の実態については，先般当場の行った実態調査においても明らかなように，従業員4～5人という企業規模であり量産品を取扱うには資本・設備・流通等の面で極めて問題が多いが，幸いにして時代的要求が，メーカー主導の製品提供型から，先述の消費者サイドの主導型に変化している現在消費傾向では，小規模という「小回り性」が有効に力を揮揮出来るような態勢が考えられる。

この時宜を得たタイミングをつかみ長期的展望のもとに，業界の再編成，浮揚も可能ではないかと考えるものである。